

どうか貴方に、溢れんばかりの幸福を

野崎エミヤ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは、人々の幸福を願う男の物語である。

目次

プロローグ 始まりの別れ

別離の日

プロローグ 始まりの別れ 別離の日



「ねえ、ホントにいいの?」

めがみ
女神の声が響く。

どこまでも広がる青い草原で。風が若草を揺らし、海のさざ波のよ
うな音が奏でられる。

まるで物語の1ページワンシーンのように、雲一つない青空と陽光が照らすそ
の場所に、一柱の女神と一人の眷属がいた。

「別に、わざわざアンタが行く必要ないじゃない」

自身に背を向けている眷属に、女神そう問いかける。

「いいえ、それは違いますよ、神アフロディーテ。貴女たち神々が望む
マキア
救界を成すために、そして最も犠牲を少なくするためには、僕が行か
なければなりません」

男が振り返る。

どこか浮世離れた了霧囲気を持つ男だった。絹のような柔らかさ
を感じさせる金髪に、紅玉ルビーのような輝きの瞳。そして十人に問いかけ
れば十人がいい男と答える程度には顔も整っていた。

まあ私の方が優れているんだけどね! とアフロディーテと
呼ばれた女神は内心、妙な対抗心を燃やしつつ、一抹の不安とともに
再度問いかける。

「……私の、私のファミリアは…嫌い?」

それは一種の、懺悔のようだった。

自分が不甲斐ないから、彼は出ていくことにしたのではないか。娯
楽を優先する神々に嫌気が差したのではないか。はたまた自分では
変えることが出来なかつた彼の運命スキルが、これ以上ここにいる事に意味
はないと判断し、出ていくように強制しているのか。

男は予想外だったのか、目を丸しくて驚いたかのような顔を浮かべ
た後、すぐに堪えるような小さな笑い声を零す。

「ふふ、くツ、ははははははははっ！ いや、すみません。笑うつもりはなかったんですが、あの傍若無人我儘姫が他人に氣遣うという状況が可笑しくて」

「ちよつとそれどういうことよ！ 喧嘩なら言い値で買うわよゴラア !! てか、いま名前のところで絶対馬鹿にしてたでしょ！ いい加減にしないとイジめるわよ！」

途端にキーキーと騒ぎ出すアフロディーテ。

愉快なその光景を一頻り楽しんで後、男はまあ冗談はこのくらいにして、と前置きをしてからアフロディーテを見据える。

「貴女のファミリアのことは好きでしたよ。最初のファミリアは捻くれ者で天邪鬼な主神に欠陥があるせいで性根が腐った後輩のみの男三人衆でしたし、主神のやらかすことへの尻拭いばかりでいつも気苦労が絶えませんでしたから」

「その話は聞いたわ。でも、苦勞していたと言っていたのにアンタ、楽しそうに話すんですもの。あの時ばかりはあいつにちよつと嫉妬したわ」

女神の嫉妬とは怖いですね、と男は笑い、空を見上げる。

「ええ、楽しかった。本当に楽しかった。あの神は行く先々で騒ぎを起こして、砂漠の海では『正義ごっこをしよう』と言いだしたかと思えば奴隷市場に介入して奴隷を片っ端から解放したり、かと思えば帝国で『革命ごっこをしよう』と言って革命集団を纏め上げたと思ったらよく分からない内に一部が成功して独立国家を作りましたし、挙句の果てには『マル秘謀報作戦をやりたい』などと言いだして、極東の《朝廷》を纏めている主神の顔に落書きをするという心底くだらない遊びもやりましたね」

「ちよつと待つてそれ聞いてないわ何してんの?! てか、改宗の時に妙にレベルが高いと思ったらそういうことしてたわけ?!」

今になって明かされる衝撃の事実には、アフロディーテは驚愕とともに声を荒げる。

砂漠の海の件はまだいい。極東も、まあ落書き程度なら可愛いものだろう。本神にしてみればたまったものではないだろうが。しかし

まさか世界勢力の一つである『帝国』でもやらかしているとは思わなかった。しかもなんか規模の大きいことしちゃってるし。

「特に極東の件は面白かったですよ。結局脱出のとき衛兵に見つかってしまったのですが、逃走中に主神は明らかに罠ワナだと分かるヒモを引つ張つて後輩を段差シがなくムなる階段ミにハメたり、後輩は後輩で不用意に壁を触った際に罠を作動させて天井からの落下物タライに巻き込まれたり、最後には壁から射出された槍やりぶすまでなぜか主神だけが全裸になったと思えば『我が肉体に恥じるところなどないわ!』と言って偶然その場にいた女性から制裁ゲンコウを頂戴していましたね」

男は眼を閉じて、当時の光景を思い出しているのか、柔らかな笑みを浮かべて楽しそうに語っている。

その様子に、アフロディーテも堪えるような笑い声を漏らす。

「ふふっ、何よそれ。ちよっと見てみたかったと思つたじゃない」

「実際、本当に愉快的旅でした。同時に気苦労も絶えませんでした、まあそれはそれです。ですがそれと同じくらい、貴女のファミリアでの生活も悪くないものでした」

男はまるで騎士が姫に対して行うように、洗練された動きでアフロディーテの前で膝をつく。

「だから貴女に感謝を、女神アフロディーテ。貴女のおかげで、僕の人生には新たな色彩で満たされ、たくさんの美しいものをこの眼で見ることができました」

貴女との出会いは間違いではありませんでした、そう語る男に、アフロディーテは少しばかり意外な面持ちを浮かべる。

男がこれほど素直に自分の本心を語るとは思っていなかったからだ。

「……思っていた以上の評価で少しびっくりしたわ。いつもそういう感じで敬ってくれるともっと嬉しかったんだけど」

だから、少しだけ不満を漏らしてもバチは当たらないだろう。

そう思っていたのだが――

「いや、人のベッドの上で枕に顔を埋めて『フヒヒ』とか奇妙な笑い声をあげながら転げ回るような神カミをどう敬えと言うんですか？」

——予想外すぎる殺人球キラースポーツを受けてアフロディーテの顔は一気に沸騰した。

「な、なななななな……アンタ、見たの！ 見てたの！！ 信じられないわこの変態！！」

「実際に見たのは一度だけでしたが、何度か似たようなことをしていましたよね？ 流石に酒を飲んだ後にそういうことをしていれば嫌でも匂いが付きますよ。まあ僕以外に気付いている人はいなかったようですけど」

「あ、あばつあばばばばばばつ！！！！」

見られたことに対する怒りと羞恥がごちゃ混ぜとなり、混沌カオスのごとき混乱がアフロディーテの脳内を蹂躪する。

もはやまともな思考ができなくなり、とある鍛冶神かっこのトラウマと相対した時のような壊れ具合が露見してしまう。

ちなみにこれから数刻の間、アフロディーテは正気を失っていた。

「ゴホン………はあ、もういいわ。いや全然良くはないけど！ 叶うならアンタの頭を死ぬほどぶっ叩いて記憶を消したい気分なんですけど！ 私は寛大な女神様だから、アンタの不敬の百や二百程度、許してあげるわ。感謝しなさい！」

未だ頬に熱が残っているものの、アフロディーテは胸元に手を当てながらふんぞり返るようにそう言った。

「勢いで……まかそうとしますね。まあ貴女らしいと言えば貴女らしいので別段構いませんが」

「うっさいわね！ とにかく！ 覚えているのは構わないけど言いふらすような真似をしたら本当に許さないからね！ もし誰かに喋ったら、地の果てだろうと天界の果てだろうと地下世界ダンジョンの底だろうと追いかけて魂の一片も残さずにドツロドロに『魅了』してあげるんだから！」

「おっと、それは怖い。前の主神から『女神の執念ほど怖い物はない』と聞いていますから。はい、今の忠告、この胸にしつかりと刻んでおきます」

不安・懺悔・驚愕・感傷・動揺・怒り。

いつもなら、ここまで語らない。

でも、互いにゆつくり語り合うことができるのは、恐らくこれが最後。

ならもう少しだけ、あと少しだけ、この時間が少しでも長く続くように、アフロディーテは言葉を重ねる。

だが、やはり物事には『終わり』がつきものである。

「では、神アフロディーテ。僕はそろそろ行かなければなりません」
唐突に告げられた男の言葉に、アフロディーテの体が飛び上がる。
嫌だ。

許さない。

行かないで。

そういつた言葉が次々と頭の中で浮かび上がり、何度も喉から突き出そうになる。

でも、それは出来ない。そう、出来ないのだ。

「……私はまだ、アンタに知ってほしいことが、見てほしい物がいっぱいあるわ。それこそ、数えきれなくくらいに」

だから、今のアフロディーテに出来ることは、一つだけ。

「アンタのやるべきことが全部終わったら、また私のところに帰ってきなさい。それが出ていく条件よ」

それは約束。

魔法も紙の契約書もない、ただの口約束。

「言っとくけど、この女神わたしとの約束を破るなんてあり得ないからね！

絶対！ 死んでも守りなさい！」

でも、目の前の男に誓わせるなら、こっちの方が良い。

何かしらの形に残るものを、男が好んでいないのは知っていたから。

アフロディーテの言葉を受けて、男は笑みを浮かべる。

心底嬉しそうに、優しい笑みを浮かべていた。

そして――

「はい、わかりました。全てが終わった暁には、必ず貴女の元へ帰ると誓いましょう」

——高潔な騎士のように礼拝を行い、そう告げると、男はそのまま進みだした。

◆◆◆◆◆

男の姿は、すぐに見えなくなった。

視線の先は広い、広い草原である。

しかし、世界的に見ても上澄みも上澄みの実力を有している自身の眷属だった男は、僅かな時間で草原地帯を抜け、あつという間に見えなくなってしまうた。

不意に、アフロディーテは頬が濡れていることに気が付いた。

いつの間にか、自身は泣いていたらしい。

しかし、それは別れの悲しみ故の涙ではなかった。

「……………嘘つき」

最後の最後に、出会ってから初めての嘘をつかれたが故の涙だった。

神には嘘が見抜けるということを知っているはずなのに。

「他人の運命は簡単に捻じ曲げて救っちゃう英雄のくせに、なんで自分のことは救おうとしないのよ。この空前絶後の大馬鹿野郎」アンボンタン

膝から力が抜け、服が汚れるのも構わずにアフロディーテは草原に腰を下ろす。

瞳から零れる涙は、止まらないばかりか時間が経つに連れてどんどん溢れ出てくる。

どれほどの間、そうしていたかは分からないが、風が冷たく感じる時間帯になってようやくアフロディーテは動き出す。

しかし、動き出したものの、その場から動くことはなかった。

アフロディーテは片膝立ちの姿勢をとり、両手を組んだ。

所謂、祈りの姿勢である。

「女神の私がいこんなことするなんておかしな話だけど、どうか祈らせて。貴方の無事を。貴方の未来を」

アルカナム 神の力も使えない、全知零能の身であることを今ほど憎んだことは

ない。

不自由であるということが、これほどまでに辛いことだとは思わなかった。

あるいは、何もできない自身の罪悪感を満たすためだけに、このようなことをしているのかもしれない。

でも、それでも。

——貴方の行く先が、どうか明るいもので満たされていますように。

頬を濡らして願う女神の祈りの行く末は、天界の神々すらも見通せるものではない。

ただ確かなのは、男の物語は下界の『未知』であることだけである。